

---

# バレット・ブルー

kazaisyu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バレット・ブルー

### 【NZコード】

NZ0680X

### 【作者名】

kazai-syu

### 【あらすじ】

『イクリップス』。かつて地球人口の三分の一を消滅させた悪夢。悪夢から背を向けた人類が向かったのは宇宙だった。新しい世界、コロニーへと居を移して。しかし、そこに待っていたのは決して希望などではなく……。学園スペースオペラ、ここに開幕。

(HPと並行して隔週で連載中。URL：[http://amaterasu.bunzama.com/syoushu/bulletbleue/rb\\_title.html](http://amaterasu.bunzama.com/syoushu/bulletbleue/rb_title.html) 更新はHPの方が早いかも?)

## プロローグ

鋼鉄が疾駆する。

強化合金によって作られた銀色の壁柱が、瞬きほどの速さで後方へと流れしていく。

その数、四。

それはまさしく、流星であった。緋と銀の色で彩られた、一筋の流星。それが宇宙という漆黒を、美しく、しかし暴力的なまでの速度で滑り落ちて行く。

それが本物の、鉄の流星であったならば、違いなく人類にとつての脅威であった。

しかしそうではない。もし速度を度外視したとしたら はつきりと見えたはずだ。

その鋼鉄が、人型であることに。

しかしたとえそれが流星ではないとしても、脅威という意味では、同じかもしれない。

それは機械である。それは兵器である。

容赦もなく人を踏みつぶし、銃弾をばら撒き、全てを無意味な残骸に変える。四メートル級の鉄の巨人は、間違いない、ヒトに対する脅威であるに違いないのだ。

流星の如き残影は、軌道エレベーターの内側を、影から影へと駆けて行く。

『 目標地点まで、残り六秒です』

(目標?)

スピーカーから流れる声に、はつとした。

……不意に、脳裏に冷たい電撃が走る。

(え?)

自分がいつたい、何をしているのか？　「」にはどうだ？

目標とは何なのか。そして自分の駆る、この機械は何なのか。

不意に、分からなかつた。

『目標地点まで残り三秒です。減速してください。警告です、減速してください』

突然のアラームと共に、眼前の画面に赤い警告画面がポップした。スピーカーから流れる女性の人工音声が、警告を告げている。

（減速……！？）

わけがわからないまま、手元にあるレバーを後ろに倒した。がくんっ、と機体が大きく揺れる。それと同時に、先ほどまでにあつた重く苦しい重圧が遠のいていく。だが……それだけで済んだわけでもなかつた。

同時に、まるで振り回されるよひ、コックピットが二転三転する。錐揉状態で落下しているのだと、不意に気づいた。『』は恐らく、<sup>A</sup><sub>C</sub> 有効重力圏内だ。

『姿勢制御、十パーセントに減衰。警告、アティチュードコントロール、システムでは回復できません』

脳裏に幾重もの警鐘が鳴り響き、未だにまったくの状況がつかめないまま、両手がシートの左右に四本配置されたステイックへと伸びる。

そこから先、どうやつたのかは、自分でもよく分からなかつた。

ただがむしゃらにステイックを操作し、どうにか回転を止め、姿勢を安定させる。同時、かつてシステムが警告した三秒間が経過し、軌道エレベーターの壁面を、足の裏（といつても機械の、だが）で火花を散らして削り取りながら静止する。

「はあ……はあ……」

『アティチュード、クリア。機体制御、回復。速度の停止を確認。作戦目標地点に到達しました』

（なんだってんだ……！）

毒づく。しかし急激に圧迫から解放された肺が、言葉を放つこと

すら許さない。早鐘のように脈打つ心臓は、痛いほどに呼吸を圧迫していた。

状況が分からぬ上に、この有り様である。当然ながら、頭の中は混乱の極みにあった。

そんな彼が、毒づく以外に、意味のある行動を起こせたのは……眼前的光景が、あまりにも美しかったからである。

息を呑む。

そこには 地球といふ名の、惑星<sup>ほし</sup>が、あつた。

地球、といふ名の惑星がある。

太陽系に属し、海があり、空気があり、生命とがあった。そういう惑星である。

しかし、たつたそれだけで、語る言葉が終わるはずがないのだ。我らの……母なるこの星が。

太陽系第三惑星、人の故郷。……言葉を重ねたところで、そこには本当の真実はない。

地球は我らが故郷にして、今や帰ることのない死の大地なのである。

破綻は、ある日突然に訪れた。

千死病。片隅で生まれたその病は、しかし二百七十四日という短さで、世界を席巻した。

それはまさしく災厄であった。あらゆる対策手段が生まれ、その悉くが水泡に帰し。ついに、虐殺といふ名の隔離政策さえもが無駄だと悟った人類は、その頃ようやく現実化した、宇宙移民政策に

縋りついた。

……そしてその時既に、人類は、三分の一以下という悪夢のよくな数へと減じていた。

イクリップス。

その悪夢は、そう呼ばれた。

人は、地球を捨てた。

これは比喩ではない。事実、人々は、自らを殺し尽くさんとする悪夢から逃げ出し、そして生き延びた。これは何も驚くことではないし、不自然なことでも、責められるべきことでもない。生きようと欲する意思こそが、命が命として在る源泉である。そういう意味で、彼らは英断した。

人は 宇宙に救いを求め、そして救われたのだ。

しかし、救われなかつた者もいた。

宇宙を眼の前にして、病に倒れたものがいた。

狂氣と恐怖に唆された人々による、戦争と言ひ名の殺戮もあった。

自ら地球に残り、悪夢と戦うことを選んだ人々もいた。

かくして時は流れ。

世界も、悲劇も、止まることなく。

そして 二百年と言ひ、長い月日が流れ去つた。

斯くして物語は紡がれ始める。

それは宇宙での物語。コロニーと呼ばれる新たな世界で、人々は歩み始める。

その先にあるものが、希望であるのか、絶望であるのか、それすらも分からぬまま 。

## プロローグ（後書き）

はじめまして、kazaisyuと申します。この度は拙作を閲覧頂き、誠にありがとうございます。隔週にて定期連載予定となつております。

## 第一話 いつもの朝に

最初に見たものは、見慣れた白い天井だった。

最初に聞こえたのは、耳慣れた時計の音だった。

何の変哲もない、いつもどおりの部屋だった。そこにあるのは静寂と、静寂に紛れるわずかな息遣い。

部屋の中には、一人の人間がいた。要約すれば、自分と、誰かだ。

「…………」

睡眠からの覚醒。身体状態を確認 異常なし。危険がないらしいことは、すぐに分かった。自分でない一（誰か）……要約すれば侵入者は、寝息を立てていたからだ。

この時、彼は既に気づいていた。何が起こっているのか。侵入者は、誰なのか。

ベッドの上で、天井を見つめていた目線を、ベッドの上へ下ろす。そこには、スヤスヤと寝息を立てる、金髪の少女がいた。自分の胸の上で、しかも割と幸せそうな顔で。

再び天井を見る。

……状況だけ見れば、恋人か夫婦が情熱的な夜を過ごした、その朝だ。

だが、二人がそんな関係であるわけもなく 当然、そんな事実がないのも自分が誰よりもわかっている。昨夜ベッドに入り、就寝するまでの間、確実に一人だった。

となれば、結論はひとつしかない。

こめかみを押さえながら といつても、両手を少女に封鎖されてしまっているわけだが 溜め息を吐く。

こういう場合の対処方法は、既に確立されつつあった。

とりあえず、息を吸い込む。そして

「キルヒアイゼン上等兵！ 何を寝ている、さっさと起きろー！」

怒鳴りつける声に、はうあつ、と眼を見開いたかと思うと、金髪

を翻す暇もないほどに迅速に、ベッドから降りて敬礼した。

と、今度はぱちくりと眼を瞬くと、こちらの顔を認めたのか、あ、という顔をした。

その少女の姿は、一言でいえば、可憐だった。すらりと伸びた手足の細さは、『華奢』といって相違ない。さらさらと光るような金色髪をポニー・テールにまとめ、瞳は美しいスカイブルーを写し取ったかのような蒼。

その造形は、男が見れば十中八九見とれてしまうに違いないほど の、金髪碧眼の美少女だ。こんな美少女に朝から抱きつかれていたと思えば、鬱陶しい気持ちもどこかにいつてしまつ。それも事実である。

ゆえに、彼 九桐斎は、いたつて平静に、優しく朝の挨拶をした。  
「おはよー」

とりあえず挨拶をすると、「あわ、あわわわわ」と慌てふためき 始める。

普段の（それなりに）凜々しい姿を見ていると、どこか笑いを誘う光景ではある……のだが、今笑えば彼女の自我を崩壊させる契機になりかねないので自粛した。

「お、おはようございます、ちゅ その、斎さん」

「ああ、おはよう、クリス。とりあえず、俺のベッドで寝てた理由について聞かせてもらえるか？」

いや、その、と口を変えながら金魚のようにぱくぱく口を開閉する少女。白磁のような頬が真つ赤に染まっている。

そして唐突に、「失礼しましたーっ！」とダッシュで逃げ去つて いった。

これもまた、見慣れた光景と言えばそうである。

（どうせ、また酒でも飲み過ぎたんだろ……）

クリスティーナ・キルヒアイゼン。それが少女の名前だ。故 あって今は共に暮らしているが、別に血縁関係があるとか、そういう

うわけではない。

もちろん恋人でもなければ夫婦でもない。

言つてしまえばただの同居人で、書類の上でももちろんただの他人だ。敢えて形容するならば……保護者、といったところだろうか。実を言えば、『もうひとつ』名前を聞けば誰もが驚く類の有名人もあるのだが、彼女がその話を嫌がるので、ここではやめておきたい。

ちなみに、見た目からはまだ十代の少女にしか見えないが、実は二十歳を超えている。

成人であるがゆえ、酒を飲む分には法律的にも問題ない……のだが、彼女が酒を飲み過ぎて酔い潰れ、拳句人のベッドで寝る、とう悪癖が割とよくあるのも確かだ。人が眠っているベッドにもぐりこむ、というのも少なくない。

（弱い癖に飲みすぎるのが悪い……）

駄目人間、というような類の少女ではない。むしろ規則正しい生活を送っている方だ。

ただ、朝も夜も問わずに怒涛のように襲いかかる類の仕事は、彼女の中にどうしてもストレスを蓄積させてしまうのだろう。

とはいってもストレスのはけ口を酒ばかりに求めていては、体によくない。そろそろ何かひとつ趣味にでも目覚めて、新しいストレス発散方法を彼女も編み出すべきだろう。

うんうん、と頷きながら彼女が秘蔵している酒類の類を、今度どこかにひっそりと隠しておいてやろうと思った斎である。

無論、彼女が知れば泣いて止めるだろうが、それで全てが片付くほど人生は甘くない。今のうちに、そういうことを叩きこんでおいた方が彼女の為だ きっとそうに違いない。

密かな決意を固める斎のことを、朝ごはんを支度すべく台所で駆けまわるクリスが知る術は、無論なかつた。

「「ううそさま」

「「」かうそります」

クリスの作った朝食（ちなみに斎の希望で今日は和食だ）に下鼓を打つた後、残った食器を重ね、台所まで持つて行く。

それに倣つたクリスに、斎は片手を振つた。

「ああ、置いといてくれ。片づけておくから」

「あ、すみません」

敬語で彼女が返す。しかし家事は分担だと最初に決めているので、斎としては「」く当たり前のことじかない。

ちなみにだが、彼女の方が年上であるので、当然ながら敬語は本來必要ない。が、忠告するたびに「好きでやつている」とですから「と返され、苦笑はしても止めてはくれないのだ。

とはいへ、彼女との付き合いも長い。もう慣れたが、若干むずがゆい時もある。

ちなみに最初はと言つと、むず痒いどころか勘弁してほしいと思つたものだ。そう思えば、なるほど、人間は成長する生き物だと実感する。

「そついえは斎さん、今日は入学式ですよね」

「ああ」

四月一日。春の訪れるこの季節は、「」日本では「」く当たり前に入学式の季節である。

当然斎も、その準備は昨日のうちに済ませてあるので、クリスの手を煩わせるところはない。疑問に思いながら、素直に頷いた。  
「その入学式つて、私も……その、行つていいくんでしょうか？」  
ん？」と眼をやると、彼女の頬は若干朱に染まっていた。

当然ながら、入学式にも父兄の参加枠というのがある。確かに、説明会の時に、もらつた書類の隅に書いてあつた記憶があつた。彼女の仕事についても、今日は休みだと聞いている。ただ……

「……目立つからな、君は。俺の知り合いだとバレたら、少し面倒だ」

「だ、大丈夫です！ 潜入任務も経験があります！」

「そういう問題ではないんだが……」

ただ、彼女の名前は嫌というほど知られているが、顔は実のところあまり知られていない。その理由と言えば、何せ、本人が写真を撮られるのを嫌がるからだ。

何でも、[写真は嫌いなのだと]言つていたことを聞いたことがある。

(……フム)

皿を無意識的に洗いながら思案する。その間も、彼女はずつとこちらを見つめていた。

「……まあ、別にいいか

「い、いいんですかっ！？」

飛び上がるようになると、あるいは飛びつくかのようにぱっと彼女は顔を輝かせる。

何がそんなに楽しいのか分らないが、まあ、別にバレンないだろう。万が一バレたとしても、自分の知り合いだということは彼女も明かすまい。

第一、彼女は既に何度も買い出しで外に出ている。それでもバレていないのでだから、それほど難しい話でもないはずだ。

「ただ、ある程度の変装はしてくれ。帽子を被るぐらいでもいい。バレないに越したことはないからな」

「了解です！」

それを聞くや否や、彼女はダッシュで部屋に駆け込んだ。苦笑しつつその背中を見送る。

(まったく……思い立つたら速いな)

いつもそうだ。いつでも全力。そんな彼女だからこそ、少しばかりのわがままなら聞いてやりたくもなる。

……ただ、この時の彼は、若干見通しが甘かつた。

それを彼が認めざるを得なくなるのは、あと三十分は先の話なのだ。

塞翁が馬、という諺がある。  
さいおう がま、といふことわざ

幸運が転じて不幸となり、不幸が転じて幸運となる。

そういう意味合いであるが、当然、そうでないことが圧倒的に多い。不幸は所詮、不幸以上の何ものでもないし、幸運は所詮幸運であって、必然ではない。よって、何の気もなしに不意に起ころし、そしてその偶然が、或る一人の人生すらも壊してしまつことだつてある。

不幸にせよ、幸運にせよ、それは同じことだ。

よつてこの時、九桐斎の身に起きた不幸が、後々になって取り戻せるとは断言できないのである。そして断言しよう。彼女の身に起きた事件は、あくまでも事故であつて、故意ではない。断じてない。

……さて、では言い訳をしよう。

食器を洗え、まずランニングに向かつた。日課である。約12kmの距離を走り終えたとき、既に三十分は経過していた。

そして学校へ行く準備を整える。服を着替え、支給された鞄の中身を確認し、部屋を出る。

さて、それじゃあ時間もあるし、クリスに準備が出来たか声をかけてみるか、ということを唐突に思い付き……そして、それが悪かつたのだろう。

トントン、と部屋のドアをノックし、そのままドアノブを握る。

「準備は出来た……か……」

言いながら、がちやり、とひねつた。言葉の最後が消えかかっていつたのは、その先にあつた光景に、思わず絶句したからである。

そこには、ズボンを脱ぎかけた状態のまま硬直した、金髪の少女が居た。

上に着る白い服ははだけられ、彼女の前に設置された鏡からは、形のいい胸と純白のブラなどが覗いている。そして眼前には、同じく白のパンツに包まれた彼女のお尻。

彼女のスタイルの良さと肌の白さに改めて驚かされながらも。こ

の段階で、既にもうどうしようもない窮地に立たされてしまったのだと、九桐斎は理解した。

そして起こせるアクションは、彼の場合たつた一つ。

「……失礼した」

がちやり、と扉を閉めて外に出る。

『%つ！？#@ つー？』

扉の中から、言葉にもならないような悲鳴が轟いた。

「……すみません……」

それから十分後。斎による誠心誠意をこめた（扉の向こうからの）謝罪によりやく折れたのか、がちやりと彼女はドアを開けた。おずおずと頭を下げたその顔には、申し訳なさと恥ずかしさが半分半分くらいで映っていた。未だ頬を若干赤く染めつつも、こちらに視線を合わせようとはしない。

「お待たせしてしまった拳銃、お見苦しいものを……」

「いや、お見苦しくはない。クリスは綺麗だからな」

言つたとたん、「はうあ」とクリスはまたもや頬を染めた。褒め言葉に弱いことは普段の経験から分かり切っている。こ誤魔化されるのは彼女としては本意ではないだろうが、無論、彼女が綺麗だと思つのも真実であるから問題ない。

…………ともあれ、そんなこんなで。ようやく、彼らはやうして家を出た。

登校路を並んで歩きだす。

お互いの服装としては、斎は無論だがただの制服で、対して四十五分という長い着替え時間を使ったクリスは、白のワンピースに鍔広の帽子……いわゆるサハリハット、という出で立ちであった。

こちらの視線に気づいたのか、クリスは少しだけ目をそらすと、ためらうように、言つた。

「……その、似合つてますか？」

「ああ、とても」

お世辞ではなかつた。クリスもそれを理解したのか、ぱつと花のような笑顔で嬉しそうに微笑んだ。

それに、とクリスは言つた。

「髪も下ろしてますし、帽子で隠してますから、まずバレないと思います」

「そうだな」

確かに、いつものポーテールが、今はロングヘアに変わつていった。美しい金の髪が、さらりと風に揺れる。

なるほど。目の前にこうしている彼女は、普通の少女だ。多少、というか、過分な脚色をせずとも十分すぎるほどの美人ではあるが、それだけだ。

斎の言葉を皮きりに、一人の間に満ちたのは、朝の静謐さを含ませた沈黙だった。

しかし不快ではない。それはお互にだつたのだろう。一人の歩く速度に、淀みはない。

「……学校があ」

彼女が口を開いたのは、五分かけて歩き、ターミナルのゲートについた時のことだった。

ゲートで指紋とパスを認証し、構内に入る。ターミナルは、口口一一全体を縦横無尽に走る輸送エレベーター……通称『クレードル』へと繋がる。エレベーターといつても個室式で、最大で時速は300kmにも及ぶ代物だ。

しかし、今この『クレードル』は、やや斜め下方向に向かつて、時速50km程度の緩やかな速度で輸送路を滑つていた。だが、たとえ300kmの速度を越えても、その振動や苦痛といったものはまったく内部には伝わつてこなかつただろう。アーマードにも応用される重圧<sup>キヤンゼラ</sup>軽減装置のおかげだ。『<sup>クレードル</sup>振り籠』の名はここに由来する。

斎は、クリスの言葉に何も返さなかつた。

返さなかつた、というより、返せなかつた……といったほうが正しいだろうか。そもそも今の言葉は、答えを欲している風でもな

つた。今も彼女の視線は、自分ではなく窓の外を流れ行く景色を見つめている。

その視線につられて、同じく斎も外に眼をやつた。

地面は、緩やかな湾曲を描き、そしてその端で、上空へと湾曲していく大地は、白い霞に隠されて消えていく。やがてそれは白から青へと代わり、やがて澄み渡る蒼い空に、薄い雲が流れしていく。

それは偽物ホログラムだ。本来は、この上空で誰かが暮らしている大地が見えるはずなのだから。しかしそうと分かつても、斎は、その空は美しいと思つた。

だからきっと、地球の空はもっと美しいのだろう。

「綺麗ですね」

「ああ」

素直に答える。毎日のように見ているこの光景が、何度見ても飽きることがないのは不思議なものだ。本来、コロニーに青空はなかつたが……精神的にどうとかといつよつな話になつたらしく、上空には、精巧な青空のホログラムが映し出されていた。

コロニー。かつて提唱され、そして様々な経緯を辿り、そして今に至つた人の居場所。

それはかつて、宇宙にある仮初めの宿として造られた。しかし今や、人類が決して欠かすことの出来ない居住の地となつている。現在のこのコロニーの人口、363万人。

人は、コロニーで暮らし、コロニーで死ぬ。

もちろん、それが月ということもあるし、火星ということもある。あるいはもしかすれば、ようやくテラフォーミング《・》が始まつた、地球ということもあるかもしない。

しかし總じて言えば。……人は今、宇宙で生きている。

不意に、クレードルの機械音声が、目的地への到着を告げた。

景色が急速に変化していく。クレードルが音を立ててその速度を弱めると、青空だった景色は漆黒に変わつた。ターミナルの中に入つたのだ。

がしゃり、と音を立ててクレードルがドアを開く。到着だ。  
さて、と鞄を掴む。

「それじゃあ、行こうか。学校に」

「はい」

微笑みながら頷いて、クリスも立ち上がる。

結局。最後まで、彼女の言葉の意味を聞けないままだつたと、  
斎は思った。

だが、それでもいい。時間は山ほどある。聞きたい時に聞けばいい。  
彼女の話したい時に、聞いてやればそれでいい。  
きっと、人生とはそういうものなのだろう。

## 第一話 いつもの朝(後書き)

話数が話数なので、一話につき一話でまとめて更新しようと思つた  
んですが… それもそれで面倒なので。なお説明は読むのが面倒臭く  
なりかねないので極力少なめですが、世界観については徐々に徐々  
に明かされていく予定です。9/29 一部本文を修正しました。

かくして、入学式である。

堂々と「機甲正鳳学院」と書かれた校門へと背を向け、意味もなく天を仰ぐ。場所は間違いないし、時間も問題ない。問題ないのだが……。

「何だか、見られてる気がするんですが……」

気がする、で済む問題では無論ない。校門を潜りうとする生徒たちは、校門に背を向けて佇む一人に、好奇心と奇異の目を向けて行った。隣に佇むクリスは、借りてきた猫のごとく下を俯いていた。「落ち着け。別に正体が看破されたわけじゃあるまー」

「で、でも、でもですよ？ 万が一といふこともつー…」

「いや、ないと思うが」

もしその万が一が起つていれば、こんな程度で済むはずが絶対にない。

「し、しかしですね……じゃあなぜ、皆私のことを見ていくんでしょう……ジロジロと……」

「それは」

生徒じゃないから、と言いかけて、やめる。今日は入学式だ。無論、父兄と共に来る人間などゴママンといふ。実際先ほどから何度も、父兄らしき人物が校門を過ぎ、同じような目線を自分たちに投げつけていったのである。

ではなぜか。もちろん、彼女の正体が看破されたところことではないだろう。

となると……

「……やはり、クリスが美人だからじゃないか？」

これしか思いつかないな、と思いつつ斎は言った。

先ほどから言っているように、隣に立つクリスティーナ・キルヒ

アイゼンという少女は、控え目に評価してみても絶世の美少女だ。そんな人間が、校門の前に佇んでいるとなれば、ジロジロと見ない人間のほうが少ないだろう。

そしてその瞬間、斎は理解した。男性に限りだが、少女に目線を向けた後、斎をなぜか殺氣やら悪意やらを乗せた目線で見ていたのだ。どうやらそれは、何の理由もなく本能的に憎たらしいとか、なんとなく顔がむかつくとか、前世で敵対していたからとか、そういつた短絡的な理由ではなかつたらしい。

ふむふむ、なるほど、と彼は頸を指で擦る。

その隣で、少女が顔を真っ赤にして俯いていたのだが、それに気づく気配もなく。

「しかし……どうして、わざわざこんな田立つところに居なければいけないんでしょう……」

さらに幾度かの視線を浴びたあと、少女は嘆息しながら疑問を告げた。

「いや、ここで待つていろと言われた。迎えに行くから、となるほど、と頷きながらも、更なる視線を浴びせかけられ、少女はさらに沈んでいく。

機甲正鳳学院。名の示す通り、日本の有する機甲学校である。機甲学校。耳慣れないこの言葉は、近年によつて創始された学業形態だ。

機甲……アーマードと称される大気圏内外で活動可能な装置、すなわちロボット。これを研究し、開発し、そして操縦するために創始されたものだ。

ただその比率は、前者一につくらべ、最後の一につきが置かれている。即ち、操縦だ。言つてしまえば、機甲学校とは軍事用の機甲兵器のパイロットを育成する、軍学校の類である。

こうした機甲学校の創立には、ここ百年のうちに高まる軍事的緊張によって、国民皆兵ならずとも、パイロットの一部の技術を底上げすることでの、軍備を拡張しようという中央政府の思惑がある。

などと益体もなく斎が考えていた、その最中。

ふと、構内に田線を向けると、一人の少女と田に合ひた。恐らく学院の生徒だろう、凜々しい、という言葉が似合ひそうな少女だ。それが、真っすぐにこちらに走つて来る。

「すまない、待たせたな」

自分たちのすぐ目の前に到着すると、息を切らした様子もなくそう言つた。

その黒髪をセミシヨートにした少女は、どうやら上級生らしかった。その身に纏つた白と碧を基調としたブレザーに、上級生の証である青のワッペンが見て取れる。

瞳の色は、日本人として平均的な黒だ。背は、斎よりはやや低いが、女子としては長身だろう。

「こちらの方が早く到着してしまつただけですので、謝られることは……」

そう言つて手を振ると、「そつか」と彼女は少し笑つて答えた。空氣も読める人らしい。

改めて近くで見てみると　なるほど、確かに美少女と言える類の少女だろう。凜とした静謐な空氣を纏つているような気さえする。

「九桐斎くん、で間違いないか?」

「ええ……はい。九桐斎です。よろしくお願ひします」

お互に手を差し出すと、軽く握手を交わした。

……と、少女は横に佇むクリスへと田線を向けた。

「それで……そちらの方は、血縁の……？」

少女の目線に倣つて、クリスを見る。無論、事前から完璧に用意していた笑顔で、クリスは即答した。

「クリス・アルヴァンスと申します。血縁、というわけではありますんが、斎の義姉として来させて頂きました」

「そうですか……いや、失礼なことを聞いて、申し訳ない」

少女は申し訳なさそうに顔をしかめると、深く腰を折つた。

苗字も違うのに、義理の姉。そういうたややこしい事情を汲み取つたのだろう。だがそれに、クリスは微笑んで答えた。

「いえ、大丈夫です。大した事情ではないですし、私も斎も、気になんてしていませんから」

少女が、今度はこちらに視線を送つて来る。斎は迷いもなく頷いた。

「そうか……」

それで納得したのか、少女は顔をあげ、小さく微笑んだ。  
「ありがとうございます。ああ、そうだ」

何かを思い出したのか、少女は呟いて再び斎と目を合わせ、握手を求めて手を差し出した。

「私は細峯結莉。三年だ。正鳳学院の風紀委員長を務めている。よろしく頼む」

そう言つて、朱色の腕章を掲げて見せる。それがどういう役職なのかはいまいち分からないうが、斎は「はい」と頷いて彼女の手を握つた。

「よろしくお願ひします、先輩」

「ああ、よろしく」

凜とした空気がふつと緩む。

本当に自然な笑顔だった。思わず自分の中の“何か”を想起してしまうような。

しかし、その“何か”が表層に現れるよりも前に、彼女　結莉は笑顔を消し、真面目な顔で向き直つた。

「それでは、今から体育館の方へ案内する。クリスさんの方は、他の委員が案内します。　おい！」

彼女が背後に向けて呼ぶと、校庭で何か話しながら周囲を見回していた生徒たちのうちの一人が、小走りに走り寄つて来る。

「駒沢、この方を父兄方の席に案内しろ」

「はい、分かりました」

駒沢、と呼ばれた少年は、柔らかな笑みを浮かべて頷いた。同性

の目から見ても、魅力的に映る類の笑顔だ。爽やかな好青年、という言葉が一番似合うだろう。

彼にしか聞こえない声で、『頑張つてください』と告げてから。

こちらです、と案内を始める少年に従つて、クリスは歩を進めた。

「随分と綺麗なお姉さんだな」

歩きながら告げる彼女の言葉に「そうですね」と答えるわけもいかず、答えに窮しつつも校舎へと目線を向けた。

改めて見れば、まあ、普通の学校だろう。もちろんそう違ひがあるわけではない。

ただ……意外な点が一つ。

(監視カメラの数が少ないな……)

通常、現代の学校のみならず、施設という施設のほとんどは、監視カメラが大量に設置されている。

『スマート』と呼ばれる、球状の監視カメラだ。全方向に対する監視撮影が可能で、かつてのカメラにあつたような視覚は存在しない。それは学校とて例外などないはずだった。

と、こちらの視線に気づいたのか、「目ざめとこな」と結莉は小さく笑つた。

「うちの学校は、生徒の自主性を尊重している。監視カメラの類もあまりない。まるでないわけではないが」

「へえ……」

「とはいえ」

彼女は腕につけている朱色の腕章を、もう片方の手でくいと引っ張つて誇示しながら、告げた。

「悪さをすれば捕まる。当たり前の話だ。そしてその当たり前を行するのが、我々の役目だ」

「なるほど」

風紀委員会。確かに、高度情報社会と化した現代では、必要とは思えない活動だ。

もちろん、監視カメラがあつては落ち着かないという人間もいるだろう。ただ、スフィアの記録映像は設置したマスターによる開放キーがなければ閲覧は不可能だし、スフィア 자체もほとんど目立たないようにならぬよう設置されているゆえ、そうそう気になるものでもない。そして最近の機種では、『登録者』として登録されたメンバーであれば、記録のオン・オフを切り替えもできたりもする。とはいえるが、その記録は残るのだが。

よつて現代では、問題になることはほとんどない。息苦しいと思ふことはあるかもしだれないが、言つてしまえば生まれた時から”そういう”なのだ。多くの人は、あまり気にすることもなく一生を終えていく。

「ま、逮捕するよつたな機会は無いに限るが……機甲学校の半分は荒くれだ。勢い余つて、くだらんことをする連中がないとは言えない」「そうですね」

教官する一方、心の底でその老成ぶりに感心する。

「今、年寄り臭いと思つたら」

「いや、まつたく」

平然と答える。ふん、と鼻息を荒く吐きだしつつも、少女は前へと足を進める。

かくして、職員室へと到達した。

「失礼します」

職員室の扉を開く　　今時にして珍しい手動スライド式だ　　結

莉に倣い、斎も一礼して職員室へと足を踏み入れた。

職員室、と一口に言つても、かつての西暦時代にあつたような、紙による書類管理は既にほとんど姿を消している。とはいへ、通常の学校ならともかく、この学校のような機甲学校では、職員室の雰囲気は一半世紀前から変わっていない。

オフィスにありがちなテーブルの上には、三面型の大型のコンピ

ユーターが設置され、机の上には大小様々なメモリー装置やら備品やらが、また違う机には何かの説明書らしき大型の冊子が山積みになっていた。恐らくこれは、停電等の理由で電子機器が全てストップした際に使用する緊急マニュアルなのだろう。

結莉の声に反応したのか、一人の女性教師が、咥えていた煙草を灰皿へ放り投げ、立ち上がるのが見えた。

「おー、御苦労さん、細峯」

「いえ」

教師らしき女性の言葉に、結莉は首を振つて答えた。ぽんぽん、

とその肩を叩き、教師らしき女性は目線を斎の方へと向ける。

「私は各務紗枝。一応教師をやつてる。君の担当ということになる

そうだから、よろしく、九桐」

「はい、よろしくお願ひします」

「うんうん、礼儀正しいのはいいこつたねー」

しきりに頷きつつも、ほれ、とこちらに差し出してくるものがあつた。

銀色の小型機械だ。サイズとしては名刺程度だろうか。一本の剣と六つの翼を模した校章が、表面にプリントされている。

受け取ると、ずしりとした感触。紙で出来た手帳よりも重い。

そして渡すや否や、「じゃ、私はこれで」とわざとどこかに行つてしまつた。説明も何もない。

思わず視線を彷徨わせると、隣で聞いていた結莉が、はあ、と小さくため息を吐いた。

「それは生徒手帳だ。横のボタンを押せば、ホログラフィックリエで起動できる。登校する時や、火器類を借り出す時に必要になる。制服の内ポケットにでも、常時入れておけ」

「了解です」

先ほどの教師 紗枝が出て行つた方角を見やる。廊下に出て行

つたのだが、もうどこにも影は見当たらない。

「……随分と、その……」

「適当な先生だ、か？」

こちらを見ずに、結莉は告げる。まあ、と小さく頷くと、彼女は何度目かの溜め息を吐いた。

「否定はしない……が、一応あれでも優秀なんだ。特に電子機器分野はな。何かと学ぶことも多いだら」

なるほど、と思う。

電子戦は今や、戦術の中核を成す一柱だ。そのプロフェッショナルというなら頷ける。機甲学校の教師が、生半可な実力で務まるわけもないのだ。

「さて……そろそろ体育館に行くか。もうすぐ式が始まる」  
はい、と頷きかけて 廊下に面した窓の向こう、中庭で、数人の男女が揉めているのが見えた。正確にいえば、紅い髪の少女一人と、それを取り囲むようにした三人の男。

「どうした？ ……む」

こちらの視線を追つたのか、同じものを視界に収めたらしい結莉が、小さく唸つた。

ちっ、と小さく舌打ち。

「何をやってるんだアイツらは……」

その声には隠しようのない苛立ちが滲んでいた。

カツカツと廊下を横切つて窓に歩み寄り、一息に開けたかと思えば、窓枠を飛び越えて中庭に降り立つた。スカートがふわりと舞うが、気にした様子もない。斎は、若干慌てて後を追つた。

「お前ら、何をしてる！」

大声一喝。ぴくり、と四人全員の肩が震える。だが、そこからの反応は対照的だった。

まず斎から見えたのは、男に囲まれていた女生徒の顔だった。表に出してはいなかつたものの、瞳の中には、隠しようもない怯えの色が混ざっている。

彼女は、こちらを視界に収めたかと思うと、少しだけほつとしたような顔をして、次いで強気に眉を吊りあげた。

「離しなさいよつ！」

掴まれていた腕を勢いよく振りほどくと、困んでいた三人の男を強引なダッシュで振り切って、一歩一歩と走って来んで来た。そのまま、自分たちの後ろに回る。

男たちは、少女を追いかけるような真似はしなかった。一人はちつと舌打ちして目を背け、一人は明らかに怒りをにじませた目でこちらを。否、結莉を睨んでいる。そしてもう一人、女生徒の手首を掴んでいた男は、こちらを振り向こうとはしなかった。それらを意に介した風もなく、結莉は一步を踏み出し、口を開いた。

「もう一度問おう。貴様らは何をしている。もうすぐ始業式のはずだが」

男たちは答えなかつた。痛々しいほどの沈黙。

たつぱり数秒を沈黙で待つてから、結莉は首を振つた。

「黙秘か、いいだろう。話は査問委員会で……」

「それには及びませんよ、先輩」

結莉の言葉を遮つて、三人のうちの一人一歩一歩を振り向いていなかつた男が、振り向いた。

至つて普通の少年だ。顔は、恐らく平均よりも整つている。どうやら一年生であるらしく、証である赤のワッペンが見てとれた。ただ……薄い笑いを浮かべたその顔は、どうにも斎を嫌な気分にする。

「……名前は？」

「一年四組の城里です。……彼女とは、ちょっと話をしていただけですよ」

城里、と名乗つた少年は、薄い笑みを張りつかせたまま告げた。

「話だと？」

結莉は言いながら、後に隠れたままの少女へと田線を配つた。金髪の少女は、強気な目で首を振つた。

「嘘です。こいつらはいきなり、私の腕を掴んで……」

「おつと、君こそ嘘はいけないなあ、アンジー？」

大仰な仕草で、城里は肩をすくめた。アンジー、と呼ばれた少女は、ぴくりと形のいい眉を動かすと、結莉に向けていた目線を、城里へと向ける。

「僕は挨拶をしたんだ。でも君は無視をした。だから、腕を掴んで止めただけさ。違うかい？」

「挨拶？ あれが？ どう見たって因縁つけてただけじゃない！」  
「でも、それを証明する手段はないだろ？？」

その言葉に、アンジーは表情を嫌そうに歪め、その視線で憎悪を叩きつけた。

「おお、怖い怖い。……でも先輩、分かるでしょう？ 僕たちは何も悪いことはしていないんですよ」

「ふむ……」

白々しい、とも言える類の少年の言葉に、思案するよひに顎に手を当てた。

確かに一見すれば、男三人が寄つてたかって、少女に詰め寄つていたようにしか見えない。とはいって少年たちに危害を加える積もりはなかつたのかもしれない。

いずれにせよ、判断は難しかつた。証明できる第三者がないうえ、自分も彼女も、公明正大な裁判官というわけではないのだ。容易に判断できるものではない。

軍隊であつたなら、鉄拳制裁かトイレ掃除を任じられて終わりだらう。

……しかし、軍学校に等しい機甲学校ではあつても、彼らはあくまで学生でしかない。

アーマードは兵器以外にも用いられる。それゆえ、そのパイロットの養成所である機甲学校は、表面上、ただの養成校として済まる。

これは現在否応もなしに緊張を増している、各国間の関係を考慮した一手だ。しかしその『表面上』といつ言葉で括るのなら、ここは只の学校、学び舎でしかないことになる。

そして残念なことに、学校という施設に蔓延ることなかれ主義は、西暦時代からまったく変化していないのである。

(確かに、手が出せないな)

斎は頷いた。少年の採った選択肢は、確かに正しい選択肢だろう。通常なら「もういい」で済まされ、何事もなかつたかのように過ぎ去るに違いない。

ただ、ひとつだけ計算違いがあった。

「……そうだな。なるほど、ではこうしよう」

それは、細峯結莉、この女生徒の性格である。

「これから私は君たちを、委員会の権限により制裁する。私に勝てたら、この場は見逃してやるわ」

## 第一話 機甲学校（後書き）

第一話目更新です。今回は少々推敲が長引いてしまいました。ヒロインその2とその3が登場。次回はようやくロボットじゃないけどバトルです。そしてヒロインその4が登場します。あれ、なんか多くね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0680x/>

---

バレット・ブルー

2011年10月10日03時23分発行